

2020年12月04日
東京都市大学 ISO 学生委員会
顧問 木村 眞実
代表 工藤 恵子
制作 川村 颯太

2020 年度

環境 ISO フォーラム 活動報告書

目次

環境 ISO フォーラムについて	．．． 2
報告書について	．．． 2
各部会報告	．．． 3
-環境教育部会	．．． 3
-省資源部会	．．． 5
-省エネルギー部会	．．． 14
ISO 学生委員会 全体活動報告	．．． 18
お問い合わせ	．．． 19

環境 ISO フォーラムについて

1. 概要

環境 ISO フォーラムとは、ISO 学生委員会が主催する環境啓発イベントである。今日において環境問題は全人類に共通かつ早急に取り組まなければならない課題であるため、多くの人へ環境について考えるきっかけを提供することを目的に、毎年開催している。環境 ISO フォーラムで実施する環境に関する講演やワークショップを通じて、最終的には参加者がフォーラム参加前よりも環境に対する興味関心を深められるように、また、このフォーラムが、実際に各人がアクションを起こすきっかけとなるように、各種企画の立案と運営を行っている。

2. 今回の開催にあたって

① 全体テーマ

「これまでとこれから」

② 背景

近年の日本は 2011 年の東日本大震災をはじめとする地震、物理的被害による生活様式の変化 を何度も経験してきている。これらの自然災害に対しては、その要因の分析や防災・減災の取り組みが行われてきている。一方、2020 年初頭から猛威を奮ってきた新型コロナウイルスは 「目に見えない脅威」であり、多くの人にとって未知の経験であるため、正しい知識の共有や議論について十分になされているとはいいがたい。新型コロナウイルスは、我々が想像している以上に自然環境及び人間環境に影響を与えているため、今回「環境 ISO フォーラム」のテーマとして取り上げ、本学の教職員をはじめとする多くの人々が情報共有や議論を行うことのできる場を提供することとした。

ただし、新型コロナウイルスについて、またその具体的な影響についても、ISO 学生委員会の構成員自身も勉強している最中にある。したがって、今回は「ISO 学生委員会も、参加者と一緒になって考える」ことを目的の一つとし、参加者全員が自分自身の周囲の環境を理解し、適応もしくは改善を検討できるようになることを目標とする。

報告書について

1. ISO 学生委員会活動報告 代表：加藤 怜（環境学部環境創生学科 2 年）

① 概要

例年「報告会」という名前で行ってきた活動報告を、今年度は報告書形式にてする。理由としては、口頭での報告を行うよりも、各自が熟読できるような報告書にして公開することで、団体の活動について周知できると考えたためである。

1. 環境教育部会

環境教育部会

部会長 郭 偉宏

ガイドライン

1. ISO 学生委員会の活動支援
 - 新入生 ISO 教育活動の推進
 - ISO 学生委員会の勉強会
2. 教員対象の環境 ISO 教育
3. 正課内の環境教育の実施
 - 正課内の環境教育としての位置づけ
 - 環境創生学科「環境フィールド・計測演習」
 - 環境経営システム学科「環境教育」
 - 卒業研究の環境影響評価

考察

- 環境教育は、継続可能性が重要。
- その鍵は、参加する人たちの心が前向きになること。ISO 学生委員会の勉強会
- 日頃の研究と教育には、環境教育そのものであるものが少なくない。
- それらを認める。

- 以上により、教職員＋学生の本来の活動が生きようにする。

⇒持続可能性

ISO 学生委員会 環境教育部会活動報告

2020年12月6日

作成者：浅井 颯太

2020年4月～12月

- 都筑区環境フェア（2020）

昨年度までの都筑区環境フェア

毎年秋季に東京都市大学 ISO 学生委員会と都筑区総合庁舎区政推進課と連携をして開催をしている。昨年度は親子で楽しむ環境講座として都筑区役所、ハウスクエアでの2回開催をした。ISO 学生委員会としては、第一回では「動物にお手紙を書こう」、第二回では「みんなで楽しむ〇×環境クイズ」を企画し、環境問題について楽しく学び考えてもらうイベントを実施した。

【イベント詳細】

- ・実施日時

令和2年10月24日（土） 13時から16時 （受付 12時30分）

- ・会場

都筑区総合庁舎6階大会議室及び1階区民ホール

- ・企画内容

今年度は「環境講座」から「環境フェア」として、さらに大きなイベントを目指し、4回開催をする予定であったが新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、1回のみで開催と変更となった。ISO 学生委員会としても新型コロナウイルスの感染拡大を踏まえて参加することとなった。下記に全体の企画内容を記したが、そのうちの(5)パネル展示へのポスター展示という形で参加をした。接触を極力避ける為に、搬入出は避け、ポスターデータを区役所側に送信をし、印刷、掲示してもらう形を取らせていただいた。

(1)らんま先生によるSDG s 講座

(2) NPO 法人 ソフトエネルギープロジェクト (SEP) によるワークショップ

(4)東京農工大学 高田教授による環境講座

(5)パネル展示

(6)3R 行動ブース

(7)カーボンオフセットアンケートの実施

パネル展示で展示をしたパネルは、「ISO 学生委員会の紹介パネル」、「3 部会それぞれの部会紹介パネ

ル」、「昨年度の環境フェア活動報告パネル」、「ISO 環境フォーラム広告パネル」、「エコプロ 2019 の活動報告パネル」である。

・活動までの経緯

6 月上旬頃に都筑区区政推進課からご連絡を頂き、都市大 ISO 学生委員会としての参加はコロナウイルス感染の様子を見ながら、できるだけ参加をするという形を取っていたが、8 月頃に参加は難しいだろうと判断をし、区役所側からパネル展での参加のご提案を頂き、パネル展のみの参加が決定となった。

来年度の都筑区環境フェア

来年度の都筑区環境フェアの開催日は令和 4 年 2 月 26 日（土曜日）となった。来年度も引き続き、新型コロナウイルスの感染状況を見ながらの開催、参加となる。

2. 省資源部会

2020 年度省資源部会活動報告

コロナ禍で見出されたポジティブ影響とネガティブ影響

－省資源支援活動への示唆－

2020 年 12 月 2 日

省資源部会長

東京都市大学 古川柳蔵

1. 背景

2020 年 2 月以降、新型コロナウイルスの影響を受け、集会や高齢者施設への立ち入りなども禁止され始めた。4 月 7 日に 7 都道府県を対象に 5 月 6 日までの期限で緊急事態宣言が発令された。5 月 4 日に緊急事態宣言の期限が 5 月 31 日まで延長されたが、徐々に特定の県において解除され、5 月 25 日に首都圏など 5 都道県の宣言が解除された。この間、住民に対して、強制力はないものの、外出自粛が要請され、不要不急の外出の自粛要請が出された。学校、保育所、老人福祉施設などの使用は停止され、また、音楽、スポーツイベントなどの開催が制限された。海外では、主に 3 月から米国、イタリア、スペイン、フランス、韓国などで外出禁止令などが出され、罰則がかされるケースもあった。

東京都市大学では、2020 年 2 月 18 日に海外への渡航を控える旨が教職員に伝えられ、2 月 26 日には海外への渡航禁止等のルールが決まり、その後、国内外の出張及び会合・イベント等の自粛が要請された。3 月 19 日の学位授与式は対象となる学生の健康・安全を第一とし、参加者の感染リスクを考慮し、式典が中止され、学位記等の授与が感染リスクを低くするための対策がとられて行われた。3 月 28 日からは教員は原則として在宅勤務を行うことになり、その後、職員も在宅勤務となり、4 月 7

日に学生の登学・入構は原則禁止となった。毎年行われているオリエンテーションや入学式等の行事は中止され、授業の開始は約 1 か月半後の 5 月 18 日となった。

それまでの期間では学生に対して、東京都市大学のホームページ、メール、Zoom などにより、授業等の必要な情報が提供された。前期前半の授業は原則オンライン授業となった。学生はネット回線のある場所で Zoom のミーティングにアクセスし、オリエンテーションや授業を受けることになった。オンライン授業は通常の対面授業より課題レポートが多い傾向にあった。6 月 26 日には前期前半の授業を全て終了し、前期後半の授業も原則オンラインで行われることが決定された（結果として、後期前半の授業は原則ハイブリッド型の授業となり対面が可能となり、後期後半の授業は再び原則オンラインとなった。）。

新型コロナウイルスが蔓延し始めた 2020 年 2 月頃から、世界の人々は実際に環境制約を受けることが予想されていた未来にいるかのように行動制限がなされた。これは日本ばかりでなく、世界中で同様であった。2050 年には地球温暖化の問題を解決するために CO2 排出量を 80%以上削減する必要があるが、2020 年 11 月に菅首相は 2050 年に温室効果ガス排出実質ゼロを宣言した。2030 年には CO2 排出量を大幅削減する必要があるだろう。政府が出している目標では家庭部門でも CO2 排出量を 40%削減することになっている。それらの削減目標と比較すると、今回のコロナ禍の影響を受けて、世界の CO2 排出量は 2020 年 4 月の時点で昨年度と比較すると 17%減少したとする報告がある (Quere,2020)。世界の経済・社会は大きなダメージを受け続けている。2030 年の目標や 2050 年の目標と比較するとコロナ禍による削減量はそれほど多くないものの、社会がどのように反応するかについては参考になると考えられる。新型コロナウイルスは、いわゆる、環境問題そのものであり、過去に経験した疫病発生と同じである。私たちの日常生活にも、東京都市大学の横浜キャンパスの省資源活動にも示唆を与えるものと考えられる。

社会ではテレワークが進展し、ステイホームをすることで家族と話をすることが多くなった、家で料理をするようになった、などポジティブな影響が指摘されている。いわゆる、「制約の中の豊かさ」である。これまでの日常生活では隠れていたが、制約を受けたことによって、心の豊かさが見出されてきたのである。この「制約の中の豊かさ」は将来の厳しい環境制約の中では重要な豊かさの源泉になり得るものであり、コロナ禍によって日本社会において実際に見えてきた「制約の中の豊かさ」は、未来の持続可能なライフスタイルを実現するロードマップを描く上で重要なエビデンスとなる。

そこで、緊急事態宣言が解除された 6 月下旬に横浜キャンパスの学生に調査を実施した。コロナ禍を 3 か月ほど過ごしたことによって、ネガティブ影響だけでなく、ポジティブ影響があったかどうかを調査し、創出されたポジティブな影響と制約により悪化したネガティブな影響を明らかにすることは意義がある。

2. 目的

本活動では、コロナ禍の影響を受け、緊急事態宣言が発令され、外出自粛要請がなされ、日常生活において学生がどのようなポジティブな要素やネガティブな要素を見出したかについて調査分析し、今後の省資源支援活動への示唆を得ることを目的とする。

3. 方法

東京都市大学環境学部環境経営システム学科の3, 4年生(16名(男性12名、女性4名))を対象とし、2020年6月20日~28日の期間中に調査を実施し、16名分の回答を得た。本調査では「コロナ禍の影響を受けて、家の中に2か月間ほど滞在していて気づいた①自分にとって良かったこと、及び、②自分にとって悪かったこと」を尋ね、得られた回答を分析した。回答の種類を分類し、16名中何名が同種の回答をしたのかについてカウントした。

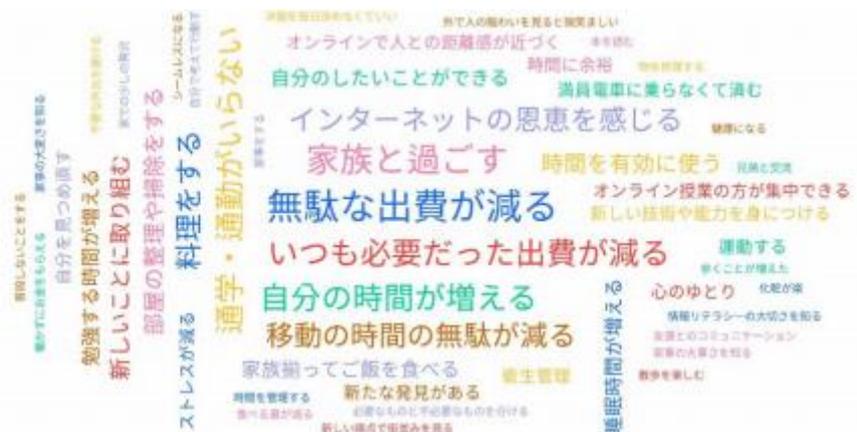
また、東京都市大学環境学部環境経営システム学科の1年生67名を対象に「コロナ禍の影響を受けて、家の中に2か月間ほど滞在していて気づいた①自分にとって良かったこと」について尋ね、得られた回答を同様に分析した。

なお、2020年2月以降、緊急事態宣言までの流れを以下に図示した。本調査を実施したのは、まさに緊急事態宣言が解除された時点であった。

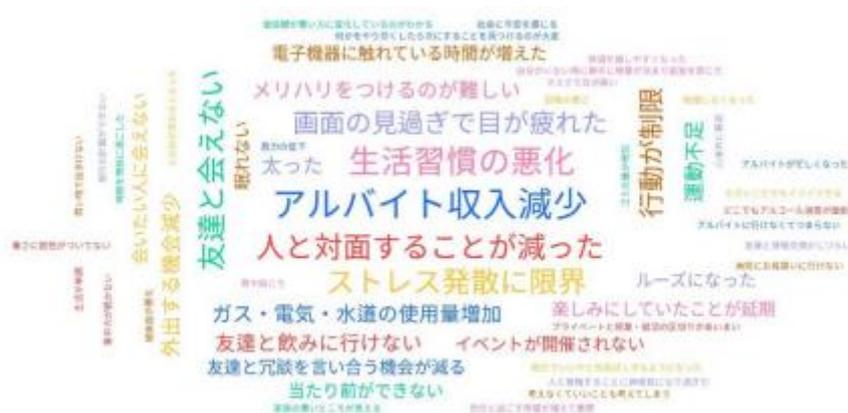
4. 結果

本結果のうち、3, 4年生の学生に対して実施した結果について、Microsoft Mentimeter を用いて図示した。回答数が多い要素については、文字のサイズが大きく表現される。

4. 1 コロナ禍で見出されたポジティブな影響



4. 2 コロナ禍で見出されたネガティブな影響



4. 3 大きな変化

3, 4年生の学生は、コロナ禍により家に滞在することを強いられた結果、以下の変化が生じたと考えられる。生活の変化に対応した学生と対応できなかった学生の両方が存在した。

- ① 人とのコミュニケーションが、外部の人から家族へシフトした。無駄な時間、無駄な出費が減り、その分、自分の時間が増え新しい取り組みに挑戦した。技術の有効性に気づいた。
- ② 一方、生活のリズムは崩れ、それに対応するのに苦労した。

● ポジティブな影響（回答数が 16 件中 5 件以上のフレーズを抽出）

<無駄の削減>

- ✓ 無駄な出費が減る（8件）
- ✓ 移動の時間の無駄が減る（5件）
- ✓ 通学・通勤がいらぬ（6件）
- ✓ いつも必要だった出費が減る（6件）

<家族の再認識>

- ✓ 家族と過ごす（7件）

<自分の時間、新しい取り組み>

- ✓ 自分の時間が増える（6件）
- ✓ 料理をする（5件）

<技術の良さ>

- ✓ インターネットの恩恵を感じる（5件）

● ネガティブな影響（回答数が 16 件中 5 件以上のフレーズを抽出）

<生活リズムの悪化>

- ✓ 生活習慣の悪化（6件）
- ✓ ストレス発散に限界（5件）

<人に会う機会の損失>

- ✓ 友達と会えない（5件）

✓ 人と対面することが減った（5件）

<経済的なダメージ>

✓ アルバイト収入減少（6件）

4. 4 予兆的变化

3, 4年生の学生は、コロナ禍により家に滞在することを強いられた結果、少数意見であったが、生活様式の変化に応じて、以下のような変化が見られた。

① 当たり前を見つめ直し、制約の中でも豊かさを見出そうと行動した。

② 一方で、生活様式の変化に対応できず、心身共に不調になり、人とのコミュニケーションや思考、行動が不調になった。また、単調な生活様式に加え、ワークライフバランスが崩れ、これまでの日常が消え、思い通りにならないことがネガティブ影響として捉えられている。

● ポジティブな影響（回答数が 16 件中 4 件以内の少数フレーズを抽出）

<日常の当たり前の中に再発見>

✓ 兄弟と交流

✓ 家事の大事さを知る

✓ 自分を見つめ直す

✓ 新たな発見がある

✓ 必要なものと不必要なものを分ける

✓ 新しい視点で街並みを見る

✓ 情報リテラシーの大切さを知る

<制約の中の豊かさ>

✓ 自分で考えて行動する

✓ 散歩を楽しむ

✓ 模様替えで気分転換

✓ 家での少しの贅沢

✓ 普段しないことをする

✓ 物を修理する

✓ オンラインで人との距離感が近づく

✓ 外で人の賑わいを見ると微笑ましい

✓ ネガティブな影響（回答数が 16 件中 4 件以内の少数フレーズを抽出）

<体力の不調>

✓ 筋力の低下

✓ 心身共に衰退

✓ 体調を崩しやすくなった

<精神的な不調>

✓ 集中力が続かない

✓ 小さいことでもイライラする

- ✓ 自分と過ごす時間が増えて憂鬱
- <コミュニケーションが不調>
- ✓ 人の目が見れなくなった
- ✓ 人と接触することに神経質になり過ぎた
- <思考が不調>
- ✓ 考えなくていいことも考えてしまう
- ✓ ルーズになった
- ✓ 価値観が悪い方に変化しているのがわかる
- <行動が不調>
- ✓ 当たり前ができない
- <単調さに飽きる>
- ✓ 生活が単調
- <内外の境目があいまい>
- ✓ プライベートと授業・就活の区切りがあいまい
- <日常が消えることへの不安>
- ✓ 病院にお見舞いに行けない
- ✓ 買い物で出歩けない
- ✓ 社会に不安を感じる
- <思い通りにならない>
- ✓ 旅行の計画ができない
- ✓ 楽しみにしていたことが延期
- ✓ イベントが開催されない

5. 資源に関する要素

今回調査対象となった環境経営システム学科の学生 83 名（67 名+16 名）はコロナ禍により家に滞在することを強いられた結果、資源に関することについて、以下のような変化が見られた

- ポジティブな影響
- 家事、部屋の整理、分別、リメイク・ものづくり・修理、無駄の削減、身近なことに目を向ける、新しいことへの取り組み、節約に関して、ポジティブな影響として捉えられていた。カッコ内の数値は 83 名中何名が指摘したかを表す数値である。

<家事>

- ✓ 料理をする（16）
- ✓ 家事をする（3）
- ✓ 家事の大変さを知る（2）

<部屋の整理>

- ✓ 部屋の整理・掃除（12）
- ✓ 衛生管理（5）
- ✓ 模様替え（1）

<分別>

- ✓ 必要なものと不必要なものを分ける（４）
- ✓ 物の価値を知る（１）

<リメイク・ものづくり・修理>

- ✓ 物のリメイク（４）
- ✓ ものづくり（家具、ペットの道具など）（２）
- ✓ 物を修理する（１）

<無駄の削減>

- ✓ 無駄な出費が減る（８）
- ✓ 洋服を毎日決めなくていい（１）

<身近なことに目を向ける>

- ✓ 自然を身近に感じられる（３）
- ✓ 自然の大切さを知る（２）
- ✓ 日々の生活を見直す（２）
- ✓ 身近なことに目を向ける（１）

<新しいことへの取り組み>

- ✓ 新しいことに取り組む（３）
- ✓ 新たな発見がある（３）

<節約>

- ✓ お金を使わない（２）
- ✓ 家での少しの贅沢（１）
- ネガティブな影響

- ✓ 消費の増加に関して、ネガティブな影響として捉えられていた。カッコ内の数値は 83 名中何名が指摘したかを表す数値である。

<消費の増加>

- ✓ 電子機器に触れている時間が増えた（２）
- ✓ ゴミの量が増加（１）

6. 省資源支援活動への示唆

2019 年度、2020 年度の環境保全項目を鑑み、本調査から得られる示唆を整理する。

6. 1 環境保全項目

環境保全項目には、以下の３つがある。

- ✓ 「（４）ゴミ減量化・再資源化の支援研究」
 - ・ 廃棄物削減のための再資源化支援
- ✓ 「（５）分別収集や有価物回収の支援研究」
 - ・ 資源回収ボックスの分別率向上
- ✓ 「（６）省資源教育・研究の発展」

- ・ 構成員全体の省資源活動に対する認識強化

6. 2 コロナ禍から得られた示唆

1) 「(4) ゴミ減量化・再資源化の支援研究」

- ・ 廃棄物削減のための再資源化支援

コロナ禍で家にいる時間が長くなった結果、料理をするようになった人が多い。部屋の整理・掃除をするようになった人も多い。料理をするようになればどのようにゴミが出るのかの理解が深まり、また、部屋の整理や掃除をポジティブにするようになり多く時間を過ごす空間の衛生管理や整理されている状態がいかに良いか気づきがあったと思われる。この変化は、必要なものと不必要なものを判断し、無駄な出費を減らす行動につながっている可能性は高い。これらの傾向は「ゴミ減量化・再資源化」につながる行動変容である。ネガティブな感情でゴミ減量化・再資源化を行うことと、ポジティブな感情で行うことでは大きな違いがある。強い制約を受けた時に見えてきた家事・部屋の整理・分別・無駄の削減の良さが行動変容のポイントであろう。

廃棄物削減のための再資源化支援としては、以下が考えられる。

<支援策>

- ・ 家庭でのゴミ減量化・再資源化に向けた行動変容を大学のキャンパスライフにも持ち込むよう促す支援策
- ・ 大学内でのゴミ減量化・再資源化のポジティブ要素を意識させる支援策

2) 「(5) 分別収集や有価物回収の支援研究」

- ・ 資源回収ボックスの分別率向上

コロナ禍の緊急事態宣言の中で「不要な外出」は控えるよう要請があった。この時、何が必要で何が不要なのか、全ての行動で考えさせられる日々が数か月続いた。学生が見出したポジティブ要素にもその影響が表れている。「必要なものと不必要なものを分ける」ことがポジティブ要素として捉えられている。「無駄の削減」をポジティブ要素に挙げた学生が多いことを踏まえると、無駄を減らしていくことの良さを体感できたものと思われる。また、物の価値を知るようになり、物をすぐ捨てるのではなく、リメイクし、修理することもあった。何に価値があるのか、有価物に対する扱いの行動変容も起きたものと思われる。行動制限によってじっくり考え、物の価値を分別することが多くなったのである。

資源回収ボックスの分別率向上には、以下の支援策が考えられる。

<支援策>

- ・ 家庭での分別行動や有価物の分別をする行動変容を大学のキャンパスライフにも持ち込むよう促す支援策

・どの部分が有価でどの部分が有価ではないのか、さらに深い知識を与え、丁寧に行動するよう促す支援策

3) 「(6) 省資源教育・研究の発展」

・構成員全体の省資源活動に対する認識強化

コロナ禍でマスコミなどではネガティブな要素が特に取り上げられる傾向にあるが、厳しい環境制約の中で、人々はネガティブな要素だけでなく、「制約の中の豊かさ」というポジティブな要素を見出す行動変容を起こすことが明らかとなった。「身近なことに目を向ける」「新しいことへの取り組み」など、新たな行動も生み出される可能性を秘めている。

構成員全体の省資源活動に対する認識強化に関する支援策としては以下が挙げられる。

<支援策>

- ・「制約の中の豊かさ」を意識させる教育・研究を推進する支援策
- ・ネガティブな要素のみではなく、ポジティブな要素も同時に提示し、認識する習慣づけする支援策

これらの支援策は、環境 ISO 学生委員会のメンバーと共に、さらに議論し、具体策を検討することにより、学生や教職員の行動変容を効果的に生み出すことが期待できると考えられる。

ISO 学生委員会 環境省資源部会活動報告

2020年 12月8日
作成者：花上 未季乃

1月～12月

<混在率測定> 1月～3月

調査対象：食堂に設置されているゴミ箱

活動内容：ごみの分別が十分に行われているかを毎月一回調査する

混在率結果：1月	燃やすごみ	57%	燃やさないごみ	40%
2月	燃やすごみ	33%	燃やさないごみ	41%
3月	燃やすごみ	21%	燃やさないごみ	26%

新型コロナウイルスの影響により、今年は大学に通うことができず、メンバーで集まって混在率測定ができたのは3回のみであった。また、2月3月は春休みであるため食堂を利用する人が少なくも少なかったため、十分な調査はできなかった。



ゴ

<キャップ回収>

活動内容：学校内に設置してあるキャップ回収箱の中身を回収する

昨年度に回収したキャップも部室に置いてあるので、今年度はキャップ回収を頼む企業を決め、回収してもらう手はずを整えるところまで進めたかったが、新型コロナウイルスの影響により、学校へ行くのが困難になってしまったため、回収は来年度に見送ることに決めた。

<ZOOMによる会議>

開催日：7月17日 9月15日 10月20日

活動内容：コロナ禍で出来る省資源部会としての活動についての話し合いを行う

新型コロナウイルスにより、大学に通うことが困難になってしまったため、今までの活動を続行することが不可能になってしまった。そこで、コロナ禍で出来る省資源部会としての活動についての話し合いを行った。また、コロナ禍が収まり大学に通えるようになったときにどんな活動をするのかについて話し合った。色々な意見を出し合えたため、各所に確認を取りながら活動を進めていきたいと考えている。

3. 省エネルギー部会

省エネルギー部会・活動報告

環境学部 環境創生学科 加用現空

大学建物の電力計測の課題

ISO 学生委員会エネルギー部会と連携して取り組んでいる大学建物の電力計測は、キャンパス入構制限に伴い、今年度の継続は困難となった。大学建物利用状況も平常時と異なるため、計測目的と計測方法は、見直し必要である。

部会目標の再定義

これまで、省エネルギーをテーマとして活動してきた本部会は、電力使用量の削減に重点を置いた活動だった。エネルギーを電力に限らず、キャンパス活動に関わる様々なエネルギー形態を対象とし、建築環境を形成の視点から取り組み内容を再整理していく必要がある。例えば、学習・教育活動に必要な光環境を作り出すために、電灯照明と昼光照明を適切に組み合わせる方策を検討するよう活動内容を見直す。

エネルギー・環境学習教材としての大学建物

上述の再定義に関連し、エネルギーへの理解を深める手段として大学建物、キャンパス空間を活用することを考える。学生の入構が制限される中で、学生委員会、関連研究室と連携して、実施可能な取り組み内容を検討する。

環境創生学科の科目「建築環境学」での試行

その一例として、太陽からの日射エネルギーに関して理解を深める題材として、横浜キャンパス、大学建物を活用する方法を検討した。太陽位置を把握し、日射熱取得、昼光による光環境形成などを理解する講義コンテンツを作成し、学部の授業（環境創生学科の科目「建築環境学」）にて講義を行った。この講義では、太陽位置図の使用を演習テーマとし、その例題として3号館を用いた。

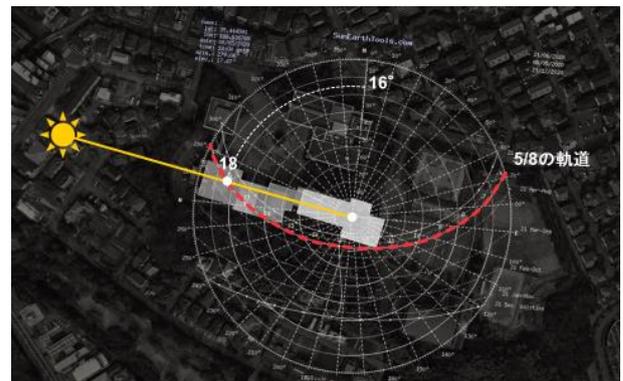


図 講義スライド（抜粋）

省エネルギー部会

2020 年度活動報告書
(2020 年 4 月～10 月)

省エネルギー部会 部会長：田伏綾菜

目次
電力測定
1、はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p2
2、2020 年度活動について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p2
3、電力測定について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p2-3
4、グリーンカーテンについて・・・・・・・・・・・・・・・・ p3
5、新企画実施について・・・・・・・・・・・・・・・・ p3-4
6、省エネルギー部会全体を通しての反省とこれから・・・・・・・・ p4

1,はじめに

今年度の活動は、新型コロナウイルスによる入校制限や今後を予期できない状況下での活動であったので活動に穴が開いてしまった。今後も油断ならない状況が続くと見込まれるので、より一層柔軟な対応で活動しなくてはならないと考えている。

2,2020 年度活動について

前期は活動がほとんどできず、本格的な活動は主に後期からとなってしまった。例年行っているグリーンカーテンはもちろんのこと、昨年度上がった案である電力測定を加用研究室と協力して研究する話も進めることができなかった。

前期の活動は1年生の入部が遅れたため、2年生4人での活動となった。毎月 ZOOM の会議を行い、今後の活動の企画を練った。この会議で出た案が「省エネルギー報」である(後述)。ほかにできなかったのがなかったので、省エネルギー報を今年度の主な新企画として進める方針とした。後期になり学校が再開されたので、現在月に一回の電力測定と省エネルギー報を活動としている。

3,1, 電力測定について

電力測定は10月分のデータから収集を開始することができた。約半年分のデータはなくなっていたが、10月からのデータは毎月収集している。

現在使用機材である Windows Vista が動作不良を起こす頻度が高いので、電力測定ができなかった半年間、windows10 に新調しても現在の方法で測定できる電力測定の機材とソフトを探したが、有線 LAN で取り込む現在の電力測定方法では Windows 7 までしか対応していなかった。よって総務センター、学生支援センターとも相談した結果、これまでの有線 LAN 式の電力測定方法を変え、コンセントにプラグを刺してその使用電力を測定する機械を何台か購入し、そのデータをパソコンに取り込む方法に変更する予定である。

デメリットとして、棟全体の測定はできかねるので各教室、もしくは特定の教室をターゲットに行うので、時間と手間はかかってしまう。しかしメリットとして、このデータ取り込み方法であると、より正確なデータが取れること。それにより今まで活用してこなかった電力測定のデータを活かす方法が増えるのではないかと考える。また、今までは棟単位でしかデータを算出していなかったが、どこの電力を測定しているのかきちんと理解していなかったが、この方法であったらその問題も解決すると考えている。

この電力測定方法変更については、現在新版企画書を鋭意作成中である。

3,2, 測定結果と考察

今年は材料不足と機会不足のため行っていない。しかし上記の通り、測定方法を変える予定であるので、一回測定データをリセットし、再来年度から測定結果を比較できるのではないかと考える。

3,3, 全体を通しての反省とこれから

新型コロナウイルスの影響で今年はデータ収集をほとんど行うことができなかったことは反省点である。また、この測定したデータを何も使用せず今まで放置していたこともよくなかったと考える。ま

ず、どこのデータを収集しているのかが確かでなかったうえ、目的もなく収集しているだけでは何も意味がなかった。本来今年度から、昨年度のデータの比較の簡易的なグラフを作成し、それをもとに作ったポスターを食堂に掲示して校内の節電啓発をすることを考えていたが、かなわなかったことは無念である。来年度以降の部員が何かしらデータを活用してくれることを願っている。

これからに関しては来年度から機材を新しくする予定なので、後輩には大変な思いをさせるが今までとは違い、有意義な活動にしてほしい。

4,1, グリーンカーテンについて

今年度は入校制限のため行えなかった。

4,2, グリーンカーテンによる効果の実証

なし

4,3, グリーンカーテンにおける反省点とこれから

グリーンカーテンは今年度行うことができなかった。しかしグリーンカーテンもただ作っているだけの活動になりつつある。電力測定と同じようにこれからは、なぜグリーンカーテンを作るのか。どのような効果を得られるのか。をきちんと明確にして来年度から活動をしてほしい。ISO 学生委員会の活動意義は構内の ISO14001 の維持活動である。もっと校内に啓発として呼びかけるような活動にするべきである。

5,1, 新企画実施に関して

今年度後期から省エネルギー報を作成し、学内掲示板・Facebook に投稿をしている。9月から開始したので現在2版まで作成、投稿済みである。

活動内容は、毎月その月に合ったテーマを決め、それに関する省エネルギーの記事を300字程度×4つ作成し、それをまとめた報紙である。毎月上旬に1回、ZOOMで今月のテーマや記事担当者、編集者を決める会議を行い、その月の20日までに提出締め切りとしている。そしてその月の担当者がテンプレートをもとに編集する。編集者は毎月の月末に学内掲示板・Facebook に投稿している。

5,2, 新企画の現状

今のところ、始めたばかりであり知名度も低いのでお試し期間になっている。ただ、これからISO 学生委員会には広報担当ができたので、広報担当がFacebookの拡散を大きくできたら知名度を上げられるのではないかと考えている。また学校が本格的に始まれば生徒の目のつくところに報紙を張り、省エネルギー啓発活動を行っていくのも1つの手段であると考えている。

また、新型コロナウイルスが収まれば、企業に取材に行つてそれを記事にしてもいいのではないかと考えている。例えば省エネルギーを謳っているハウスメーカーなどであれば、有意義な取材と良い記事が書けるのではないだろうか。

5,3, 現段階の反省

上記の通り、始めたばかりとは言え知名度がないのが難点である。これからの目標としては知名度の向上を第一とすべきであると考えます。

また、さらに充実した内容の報紙を目指すことも大事にすべきであると考えます。

6,省エネルギー部会全体を通しての反省とこれから

今年度は ISO 学生委員会自体の活動内容全体が少なくなっていく中、省エネルギー部会は新しい企画や定例会議を行っていったので、割と臨機応変に対応できたのではないかと考える。これからは、新企画のより一層の充実化と電力測定方法変更が大きな課題となってくると考えているが、このコロナ禍でいかに動けるかがいまだ先行き不透明であるので不安である。ただ、1年生も遅れてだが3人入ってくれたので、残り少ない期間であるが、7人でできる限りの活動をしていきたいと考えている。

東京都市大学 ISO 学生委員会 2020 年度 全体活動報告

東京都市大学 ISO 学生委員会 2020 年度全体活動報告

作成者：工藤恵子（環境学部環境創生学科 3 年）

1.総括

今年度は新型コロナウイルスの流行の影響により、長期間にわたって大学が入校禁止となったため、多くの活動の中止を余儀なくされた。

そのような制限下において、前期に力を入れた活動は新入生勧誘である。登校ができないため、オンラインでの広報に重きを置いた。学生団体連合会などが主催するオンラインイベントの他に、大学主催のキャンパスツアーでの告知や、SNS を使用した説明会の告知などを実施した。また、都筑区役所における環境イベントへのパネル出展も行った。

後期からは、主に環境 ISO フォーラムの実施に向けた活動を行った。また、活動再開申請が通ったため、一時的及び条件付きであるが、電力測定等の通常活動を再開できた。

2.活動詳細

4 月：新歓動画の作成と公開

6 月：環境学部 2 学生会と共同での活動説明会、学団連主催の活動説明会、単独での説明会等を開催

8 月：定例会の再開（木曜 21 時、後に火曜昼休み）、環境学部フレッシュズミーティング時の活動説明、フォーラムの企画開始、環境系団体合同説明会の開催、オンラインオープンキャンパスでの活動説明

9 月：キャンパスツアー補助（対面）

10 月：フォーラムの 1 イベントである「いそっと」の単独開催

11 月：フォーラムのリハーサル

12 月：フォーラム本番、企業マッチング会。チャリティーフェスティバルへの参加、ウィンターフェス

ティバルへの参加

3.今後に向けて

今年度は、新型コロナウイルスの流行による活動制限によって、例年行っていた活動参加していたイベントがことごとく中止となった。しかし一方で、オンライン上でもポスター・動画作成などを活用した勧誘活動やイベント参加が行えるという点は新しい発見であった。

露呈した課題としては、あらゆるイベントに関する発信力の不足、オンライン時の時間の確保の仕方などがある。仮に来年度コロナ禍以前の水準に生活が戻ったとしても、これらを対策しておくことは間違いなく強みになるので、努力していきたいと思う。

お問い合わせ

代表・文責：工藤恵子 g1861030@tcu.ac.jp